

新会員になられた皆様へ

経済学部同窓会会長 住野 公一



皆様。ご卒業おめでとうございます。どうか、社会で活躍される事をお祈りします。勉強も同じかと思いますが直線的に順調に行きません。山有り谷有り。谷に入った時に話を聞いてくれたり励ましてくれたりするのが校友会、同窓会の先輩です。まず、校友会、同窓会の門を叩いて下さい。皆様に温かく迎えてくれます。

さて、少子化の中で大学は今大変な競争に晒されています。合併されたり消滅した学校も有り、我が母校だけはそんな悲しいことがないようにしなくてはなりません。経営陣、教授陣、学生、父兄、そして卒業生が一丸となって支えて行かねばなりません。今、校友会では金銭的に支えて行くために寄付運動を始めています。お金に余裕がある人もない人も生活に影響がない程度の少額寄付を集めようとしています。こちらの方もご理解頂きご協力宜しくお願いします。

経済学部の2012年

経済学部長 松原 豊彦



卒業生のみなさまには日頃から経済学部へ温かいご支援をいただき、厚く御礼申し上げます。経済学部を卒業して新たに会員になったみなさんにお祝いを申し上げます。

2013年は様々な企画を実施するとともに、学部同窓会の新たな活性化に取り組む年にしたと考えております。ゼミ、クラブ、サークルなど多様な軸による同窓会、東京圏における卒業生の増加をふまえた各地域の集まり、大学教員・研究者の集まりなどのアイデアが検討されています。この間学部同窓会から卒業生の集まりに対して補助をさせていただいております。こうした支援を大いに活用していただき、卒業生の交流の輪を広げていただければ幸いです。

さて、経済学部では2016年を目処に学部新展開に向けた検討を進めております。これまで社会科学系大規模学部として果たしてきた役割や教学上の到達点をふまえて、より質の高い教学と社会的貢献をめざして新たな展開をはかるものです。2015年に経営学部がBKCから大阪茨木キャンパスに移転することが予定されており、経済学部はBKCにおける社会科学系教育の中心拠点として、また滋賀県・草津市等地域との関係において今以上に重要な役割を果たすことが期待されています。学内では経営移転後のBKCにおける人文・社会系の新しい教学分野（新学部）の検討が進められており、BKC新教学分野との連携を進めつつ、経済学部としての新たな展開をはかりたいと考えております。

そこでは、①モチベーション重視の初年次教育、②4年間を通じた小集団教育と卒業研究の充実、③就職・キャリア教育の抜本的強化、④国際化教育の高度化、⑤小集団やプロジェクト研究等で使える学習施設の拡大、などを柱として検討しております。とくに昨今の就職をめぐる状況から、3回生以上に対する就職・キャリア教育を強化することは喫緊の課題であり、2013年度から学部独自の企画を先行実施する予定です。卒業生のみなさまには、学部の就職・キャリア教育の企画に対するご支援・ご協力をお願いする所でございます。

卒業生のみなさまとの絆をいっそう強くするとともに、経済学部の教育・研究成果を国内外で発信し、大学の社会的役割を発揮していく所存です。今後ともよろしくお願いたします。



第9回経済学部同窓会総会を開催！

2012年11月10日（土）、朱雀キャンパスにて100名を超える参加者が集い、経済学部同窓会の講演会、第9回総会が開催されました。

講演会では、映画化もされた『武士の家計簿』の著者で静岡文化芸術大学文化政策学部准教授の磯田道史氏を講師に招き、『『武士の家計簿』から見た経済学』をテーマにして経済学と歴史学の視点から江戸社会の社会構造とGDPについて講演をいただきました。

講演会に続き、第9回総会が開催され、活動報告と今後の計画、収支決算と予算、役員体制について提案され、満場一致で承認されました。（役員体制は下表のとおり）

総会の後は参加者の懇親会が開催され、名誉教授と退職された先生から、濱崎正規先生、芦田文夫先生、奥村功先生、坂本和一先生、甲賀光秀先生、戸祭達郎先生にお越しいただくとともに、経済学部からは松原豊彦学部長、稲葉和夫教授に参加いただき、参加者は旧交を温め、近況報告に花を咲かせました。経済学研究会と稲葉ゼミからは現役の学生が参加し、親子ほどの先輩と貴重な交流を深めました。学生からは先輩がつくり上げてきた伝統を引き継ぎ、立命館大学経済学部生として力を発揮していきたい旨のスピーチがあり、参加者から温かい拍手と声援が送られました。

懇親会には川口清史立命館総長と山中諄立命館大学校友会会長それぞれからいただいた祝電が披露され、花を添えました。最後に松原学部長から経済学部同窓会のますますの発展を祈念するとともに現役の学生との交流を推進させていきたい旨の挨拶があり、参加者一同、再会を約して盛会のうちにお開きとなりました。



役職名	氏名	勤務先	卒業年
会長	住野 公一（再）	(株)オートボックスセブン相談役	1970
副会長	菅下 清廣（再）	スガインタートナース(株)代表取締役社長	1969
	吉田 郁雄（再）	(株)滋賀銀行 専務取締役	1977
監事	浅田 和史（新）	立命館大学経済学部教授	1981（院）
	橋本 弘之（新）	元立命館百年史編纂室 参与	1966
顧問	松原 豊彦（再）	立命館大学経済学部長	
	横山 政敏（再）	立命館大学経済学部教授	1971
事務局長	山岡 祐子（再）	(株)白川書院 代表取締役 編集長	1983
会計	澤田 博昭（再）	立命館大学国際部 留学生課課長	1997

●磯田道史氏 講演会

『『武士の家計簿』から見た経済学』

現代との比較を通した江戸時代の貨幣価値や、幕末から戦前の農業を基盤としてきた日本社会の農業と非農業の租税負担率の違い、江戸時代から明治時代の地方別の水田生産力と識字率のかかわりなど、豊富な資料にもとづき日本社会の姿と構造を具体的にわかりやすくお話していただき、参加者一同、熱心に聞き入りました。



磯田道史氏 略歴

慶應義塾大学文学部史学科卒業後、2002年、同大学院文学研究科博士課程修了。

慶應義塾大学非常勤講師などを経て、2004年より茨城大学人文学部助教授、2007年より准教授。

2012年4月から、静岡文化芸術大学文化政策学部の准教授に就任。

多数の著書を執筆。『武士の家計簿「加賀藩御算用者」の幕末維新』は、2003年に第2回新潮ドキュメント賞を受賞。2010年には森田芳光監督によって『武士の家計簿』として映画化。

武士の家計簿からみた経済学

磯田 道史

●私と立命館

私は岡山で生まれまして、田舎なものですから、中学高校時代に家で古文書を読むというようなことを始めまして、ひたすら歴史少年をやっていたんですね。そうすると何も分からないものですから、とりあえず京都に行けば古いお寺とか史跡だとかがあるから、京都の大学へ行こうと思ったんです。学費も安かったし、その当時は大学院もなかった京都府立大学へ入ったんですよ。ところが京都府立大学願書を書いて受験票が届いて見てみたら、ビックリしたんですよ。立命館大学の衣笠校舎へ来てくださいと書いてあって。後でわかったのですが、京都府立大学はあまりに小さい大学だから、受験生全員を収容できる校舎がなく、だから立命館大学をお願いして、そこで受験をしてくださいということだったんですね。それで衣笠の立命の前に宿を取りまして受験のために行ったんですよ。立派な学校でしたよ。本当に。しかし試験中、

窓から見える等持院の歴代の足利の苔むした墓が気になって仕方がない。早くこの受験を終えて等持院に行きたいと思っていました。試験が終了すると立命館の中を通過して、すぐに等持院行ってお坊さんにあれこれ幕末の事を尋ねて帰ったのを覚えています。

その時点ではまだ府立大学に行っていないのですが、合格発表のときに初めて行くと立命館とは打って変わって小さい学校なんです。そして入って見たら大学院がないと。先生に僕は歴史しかやってきていないので、歴史学者や歴史の博物館の職員になりたいと相談したら、それは大学院に行かなくてはだめだよと告げられました。今は立派な大学院もあり歴史学系では有名なのですが、当時はなかったのですね。そのあと一年間は京都府立大学で過ごしましたが、こんなことしていいのかと思ひまして。先生に勧められて当時経済史の本を沢山読んだのですが、当時は無名の学者さんだった慶応大学の速水融さん（2009年文化勲章受賞）が江戸時代の人口とか平均寿命、出産時の乳幼児死亡率、平均結婚年齢、生涯何人出産するか。などを研究しているこれは面白いなと思い、翌年慶応大学を受験して、速水先生のいる学校に移っ



たわけです。

●江戸時代とは どういう社会か？

まず江戸時代は経済学的にみてどういう社会か？と言う全体像からお話したいと思います。現在我々の社会と言うのは1億

2,500万人くらいの人口であるかと思うのですが、戦国時代、つまり信長や秀吉や家康が栄えていたころの日本の人口は、おそらく1,200万人とか1,600万人とか1千数百万人台であったのは間違いないであろうとされています。ただ、戦国末期の人口は今の10分の1くらいのスケールなのですが、凄と思うのは、社会における権力の統合度。例えばどんなことかと言いますと、豊臣秀吉が朝鮮半島へ軍を出しますね、向こうからすれば侵略です。そのときに大体どのくらい兵を送り込んでいるかというと、14万人くらいは確実に海を渡らせている。一方国内動員を入ると、45万～50万人近く動員しているわけです。当時人口が1,200万人と言う事は、半分が子どもです。ですから600万人しか大人はいなくて、さらに女性が半分ですから、成人の男性はおじいちゃんを入れても、300万人くらいしかいないわけです。その300万人の中の50万人を動員して、肥前名護屋まで動かして、軍隊に統合し、ロジスティクスとして整備して兵糧を送るということをやっている。これは石田三成や秀吉の官僚制度の芽生えですね。軍事官僚の芽生え、非常に細かい優れたものを持っていたからだと思うんです。

ただ、何故日本人がこの『奪った社会（日本人総武装の時代）』に戦国末期にかけてなったのか分からないんですよ。多分平安時代や奈良時代はそういうことではなかったと思うんですけども。

例えば『月代を剃る』というのがありますが、ちょんまげの時頭を剃っていますよね。あれは兜を被ったときに蒸れては困るからと、南北朝時代頃からか、鎌倉の終わり頃から侍の中で剃り始めるわけです。でも剃ると言うのはうそでして太閤秀吉の天正年間になるまで、実は毛抜きで抜いていた。剃るのは出家であって、抜いていた。恐ろしい話ですが、記録によると凄いい血が出たと、黒い血がどろどろ出たと、血みどろになってちょんまげを結っていたと。主君のために戦争に行くときに兜を被って行くのだから、「このくらいの痛さ何するものぞ」という気概だったのでしょう。侍がやるのならわかるのですが、津々浦々にいる百姓までもがそのヘアスタイルをして総武装をして、乱に備えているわけですね。これは『自力救済』だと言っているのですが、盗人がいても何がいても自分たちの村で自警団とって自分たちの警察力で捕まえたり管理する。場合によっては、大和郡山にある稗田の環濠集落のように村ごと周りに壕を掘り、中に村人たちが槍や刀を用意して毎日のように頭の毛を抜いていつでも兜を被れるぞという形で目を血走らせている。この状態でお互いに領地争いを数百年繰り返すのが日本人の中世の様子なんですね。ですからそれで勝ち上がっていくのが豊臣秀吉の権力であり、秀吉がやったことというのは、成人男子が300万人程しかいない社会で、その50万人を一声で動かす事ができる。6人に1人を強制的に徴兵できることなんですね。これは近代社会と比べても相当すごい事なんですよ。

日露戦争の時、日本の人口はこの時の5倍以上になっているわけです。5,000万とかに迫っているわけです。その時ようやく初期の兵士の動員が50万ということですから、日露戦争で大陸渡らせて作戦展開するくらいの計画と動員というのはもう秀吉の時代に相当出来る。あと大体天下人の軍隊というのは、1戦場に20万くらい集中していますよね。例えば大阪城を攻めるという時には、大阪城に10万人から9万人立てこもったとすると、徳川方が20万人くらい連れてくるわけですよ。1戦場で30万人が戦いあっているわけです。人口の規模というのと今の10分の1くらい8分の1とかそれくらいでこういうことが出来る。わけですね。だから相当に戦の中で鍛えられ、権力の仕組みが発達した

世の中として出発している。

よく間違いだと思うのはヨーロッパから来た人は日本の明治時代が凄いやたらに言うのですよ。ほんの10年位前までちょんまげ結って、刀をさしていた日本の侍たちの世の中だったのに、明治10年くらいには電信線が日本中に張り巡らされて、明治20年代になるころには相当なところまで、鉄道が走り回っている。こんなのは世界史上の奇跡だと、ヨーロッパの人たちは言うんですけども、私は少しちがうと思うんです。明治時代の社会というのはいきなり発生したのではなくて、実は室町時代が凄いです。1,600年頃とか織田信長の時代に、ヨーロッパで行われた戦を考えてみてください。ウィーンの町がオスマントルコに襲撃された。イスラム教徒に襲撃されたというどのくらいの兵士で対抗していますか？まあせいぜい4万だとか3万だとか、まあそんな数です。しかし、当時の日本で関ヶ原は何十万という兵で戦っている。また国内にどの位の銃器、火縄銃が存在するかというと、ヨーロッパでこれくらいの密度のところではこれくらい銃砲をそろえている国家はないと思う。比較するところとは言えないのですが、もし日本がイギリスの場所にあったとしたら、あつという間にヨーロッパをすべて侵略できていると思います。それくらいの恐るべき軍事強国に戦国時代に到達しているわけです。ただ、江戸時代に何がなかったかということ、これは経済学の話になりますが、化石燃料、石油・石炭の熱で動かす機関というのがなかったわけです。エンジンだとか発電設備であるとか、要するに蒸気機関ですよ。それ以外のあらゆるものが出来上がっているのが江戸社会です。

●江戸時代の社会分業

江戸時代のいいところは何かということと社会分業だと思います。

僕は色々な町に行ってその町のタウンページを開くのが好きなのですが、京都なんかはもの凄く変わった分野がありますよね。例えば三味線を作る人。もしくはもっと分業が進んでいるとするならば、三味線の皮だけを集めるとか三味線の撥だけを作るとかいう職人さんが住んでいる可能性がありますよね。東京とか都会に行くと職業別の分類は細かくなるんですけども。

江戸時代の社会分業というのは、相当なもので、よく一例として紹介するのですが、琵琶湖に当時は船が浮かんでいて、敦賀から北側の北陸筋の米などの穀物を船で大津まで運び、大津で荷揚げして、京都や大阪に運ぶわけですね。この船の中には当然ねずみが住んでいるわけで、このねずみは他のねずみと違い外を走り回っていませんので、非常に毛が汚れていないわけです。ましてやねずみのわきの下の毛は一番ふわふわしてきれいだ。ということでこのねずみのわきの下の毛だけを集めて売る商売があったのです。何に使うかということ、ねじ筆とって京都の漆の時絵を書く時に、時絵というのとはとにかく何ミクロンの単位で金箔の線を引かなくてはならない。これを科学的なものが無い時にきっちり1ミリに10本線が引ける筆というのはそういうものでないと作れない。東山のふもとに時絵師の家があって、いつもねじ筆を需要しているわけです。こういう筆を作る職人は相当熟練していないといけません。ですから、大津からそういう毛だけを仕入れて、生涯ねじ筆だけを作る一流の職人がいたわけです。それで始めて、京都のああいう時絵が出来たわけですね。

こういった社会分業が成立しているというのは、これは経済社会の段階としては非常に高い段階を示している。ここへ石炭を持ってきて化石燃料をドッキングさせて鉄道だとかいろんなものを入れてやれば、あつという間にヨーロッパに追いつくのは当たり前なんです。江戸人が当時の地球上の人類としてはかなりの水準のリテラシー（識字率）だったのです。ただヨーロッパを越えていたわけではないというのが私の意見です。

江戸時代の最初の100年で人口爆発が起き、人口が3000万に到達しました。赤穂浪士があったころ、大体1500年～1600年の関ヶ原の時から100年間くらいで2倍くらいに伸びますね。これは新田開発が行われどンドン土地の面積が増えるということが大きくあります。ところがある一定程度でこの新田開発は、土地を干

拓したり低湿地を開発したりするものですから、行き詰まるのですね。技術的にも行き詰まるし、技術的にももうこれ以上開発を続けていくのは無理かなと思う時に宝永地震と津波がありました。

余計な話を挟みますが、「次に東海地震が来たときに、何秒間いや何分間揺れ続けるのだろうか？」という疑問が、僕は気になり、「過去の地震学者がそれを本当に古文書で解明しているのか？」を第1の研究課題にしました。日本地震資料というのは活字で刊行されているのですが、目を皿のようにして全部見たんです。そうしたら一通り分かりました。結論から言うと南海トラフが動くとも10分間揺れます。だからシミュレーションで言っているのとそう変わらない。今回の東日本大震災の体で分かる地震の揺れは6分でした。まあこの中にも東京から来られた方もいらっしゃると思いますが、死ぬような揺れでしたね。私は震度5強しか体験していないのですが、長いのですとにかく。

何故江戸時代の地震の揺れた時間が分かるかといいますと、京都のお公家さんと近衛家と言うのがありまして奥に陽明文庫というのがあります。ここの近衛家の当主と言うのが流石に最高レベルの知識を持っているのです。元禄地震が起きたときに、当時の当主・近衛基熙が揺れている間何歩歩くくらいか1歩2歩3歩と頭の中で考えていたそうです。すると距離にすると7.8丁800m歩くくらい揺れたといったそうです。あと他にも和歌山県の大畑才蔵という治水工事の天才土木技師がいて、この人もやっぱり7.8丁歩くくらい揺れた。と同じように証言しています。不動産屋では80m歩くのが1分だそうです。江戸時代の平均身長は男が大体160cm女が140cmですので大体女性にあわせて80cmと言っていますので7.8丁800m歩けるという事は大体10分ということになります。

東海地震は90年間に2回起きた歴史的記録はない。150年間確かに起きなかったことはない。1番良く起きるのは100年から110年でほぼ起きています。150年間起きていないと起きた時の威力が凄いです。最近起きたのは昭和19年ですから約70年間が経っています。人間で例えると南海トラフ君は大体寿命が100歳で短いと90歳。長生きすると150歳、今70歳に今なっている状態ですので。我々には20年位の余裕があるのでこの間にいろいろな事をしないとイケないと言う事ですね。

話は戻りますが、明治の初めまで人口はあまり伸びません。人口の伸びと言うのは穀物の取れ高に比例しておりまして、一番人口が多かったのは今の新潟県越後の国だったと思います。大体200万人いました。今も確か新潟県の人口は200万人だと思えます。日本全体の人口は4倍になったのに越後の国新潟だけはそのまま。で、増えた分は田中角栄さんみたいに東京に移動しているのです。人口というのはそういう感覚で捉えていただければと思います。

あまり人口が増えないのはなぜかと言うと、1つは農業社会であった。われわれが思うより人口が増えない仕組みが江戸社会の中にいっぱいあるんです。この村は百姓の数は何軒に留めておくという約束事があったり、要するに家の株ですね。大体30件で株を置いて、もし新たにこの村で百姓になりたいければ、その株をどっから貰うか、譲ってもらうかしかない。今のお相撲と同じ原理ですよ。もしどうしても増やしたいなら、株内といって内で分ける。というように、規制が凄かった。株の持てない人間は都市へ出て奉公人になる。結婚年齢が男でも30歳以上とか、生涯独身という人は江戸時代にはそんなに多くないのですが、今の日本の社会はいろいろな面で第二の中世になりつつあると思うんです。戦国時代までは生涯未婚の男性も女性も多かった。それは人の家に奉公人になったり、名子とか被官といって、生涯結婚せずに主人のために奉仕する。そういう人が多くて人口の比率が多かったからだと思います。

それに比べ江戸時代は皆が結婚する皆婚社会に近いものが出来ていた。江戸時代はその点ではいい社会だったと思うんです。皆に持ち場を与えていた社会だったので。

では、持ち場はどういう風にと与えていたかということ、明治時代にラフカディオ・ハーン(小泉八雲)がこんなことを書いています。

「若い人力車夫がいて、遙か向うに年老いた人力車を引いた車夫いる。そのうち若い車夫が年老いた車夫に追いつくが絶対に追いつかない。年老いた車夫が路を曲がって違う方角に行った所で初めて勢いよく走り出した。」

これは若い車夫が追いついては年老いた車夫は立場がなくなるため、このような慣習があったようです。これは消費者にとっていい事かどうかという問題はありますが、ある種の業界ルールというのが出来ていたわけですね。皆生涯食われる社会を人力車夫の社会は成立させていたのでしょう。これは江戸時代の社会がある程度閉鎖的な社会だからこそ成り立っていた面はありますが、分業され非常に安定した皆が食われる社会であったと思います。

●江戸時代の税制

江戸時代のGDPというのがありまして、1藩だけ計算出来るんです。流石に長州藩です。後に大蔵省を握るのは長州藩でしてその準備は江戸時代からなされていたわけですね。「防長風土注進案」という産物調査を行っている。普通の藩なら産物だけを調査するのですが、その産物を作るにあたってどれだけのコストがかかったかを調査し、投入産出分析を可能にしたわけですね。産業関連表が書けるわけですね。人間を何人投入して牛を何頭投入して肥料をどれだけ、農具をどれだけ投入してこの村は産物を算出したかを村ごとに調べている。付加価値生産の量、つまりGDPを出す事が出来る。1840年頃に作られた史料を基に長州藩のGDPを調べたら、大体農業生産で80万石、非農業生産で72万石、合わせて152万石のGDPがあることが分かった。だから、長州藩は表ざた38万石ですから酒造りとか塩田だとかは材木だとかは、すべて入れたら152万石の生産がある。

ただ、ここで重要なのは税金の掛け方なんです。租税は江戸時代は厳しいといひます。4公6民といひまして40%は米を作ると領主に持っていかれる。それは本当です。租税負担率を計算してみると米や麦を作ると10,000円分作ると3,850円持っていかれるわけですね。

ところが江戸時代の面白いところは非農業生産、例えば材木を売ったり、機小屋をやったり、あるいは蠶を作ったり、塩田をやってみたりと色々なことをやると、なんと1.3%しか税金がかからない。だけど10,000円、米や麦を作ったら3,850円取れるのに、普通に商業をやったら130円くらいしか税金取れないということ、ほとんど税金を課してないということですよ。

これは当たり前といひえば当たり前なんです。江戸時代は石高制と言って高付きされた農地から税金を取るシステムで、営業税も無ければ、所得税もない税制としては非常にいいです。なぜかというところは封建領主ですから、地代を取るの当たり前、田んぼを貸している大家だと思えばいい。自分たちの領地だから家賃なり、店賃が取れる。だけど、田んぼを作っている人(大家さん)そこの店子がアルバイトをして稼ごうが、何をしようがそれに対して課税する権利はない。というのが、封建的な普通の領主のあり方で租税を取る正統性がない。という考えなんです。

江戸時代は石高に基づく農業社会だといひているけれど、振り返って考えてみると、270年くらいかけて、商業優遇税制、工業優遇税制をやり続けたとも言えるんです。税金を取らないんですから。これは幕末に来た外国人が驚いていますね。「この国はなんだ!?」と。当然取るべき営業税も取っていない。とにかく農地だけから取っている。これは江戸時代の社会の弱点になっているんです。足して見ると大体租税負担で15%くらいなんです。

あともう一つ重要なのは二毛作をやった場合、裏作の麦は無税ということ。これが西日本と東日本の経済格差を生みます。明治44年~大正4年の間のお米の10aあたりの反収ですが、2.5石も取れたのが奈良、2.3石取れたのが大阪、2.15石くらい取れたのが滋賀と佐賀。香川も高いですね。これはほとんど関西です。特に京都を中心にした地域です。このような地域は裏作に麦が獲れてこれは無税なんです。圧倒的に京都周辺が豊かです。特に滋賀は豊かです。取れないのは二毛作が出来ないところですね、北

海道や秋田周辺です。あとは乾田になっていない湿田のまま放置されている田。面積あたりの収穫量が二倍近く違うわけですから。それに加えて妻が無税であるとなると収入が4万円近く変わってくる。同じ規模の農家であったとしても。そうすると文字を読める人と読めない人でもすごい格差が生じてくる。京都から名古屋、京都から奈良までが非常に識字率の高い地域になる。

アメリカ軍が日本を空襲した時、戦略爆撃調査団というのがものすごい調査をしている。各地の事が書いてあるわけですが、その中で京都の欄にここは日本で一番知的な人々が住んでいる地域と書かれている。また、戦時中に想定教育調査というのがありまして、徴兵をする時に今の全国学力調査のようなものを、20歳の成人男子に課している。さっき言った地域というのはやっぱり高いですよ。私が赴任した茨城はいつも下から3番目の地域で下から2番目が青森なんです。これは本当にお米の取れ高に比例している。だから今は関西の地盤沈下なんてことが言われて久しいですが、民度の蓄積というのがしっかりあるというのは間違いない。それはタクシーに乗っても、知識の豊富さにおいては関西人のタクシーというのはすばらしい。これは関西の財産だと僕は思っています。

●一両の価値と代官所

一両の価値がいくらかというと、1両は大体米1石なんです。江戸時代最後ちょっと狂乱物価になったんですけども、江戸時代を通してそうだったようです。1石1両小判1枚はどのくらいの物を買えるかと言うと、これは天保期・1840年頃の例ですが大体30万円くらいで間違いないだろうということです。ちょっと多めだという人もいます。これは二通りやり方があります。労働賃金で換算した場合が30万円、お米で換算した場合が5万5千円。どういう換算の仕方かと言うと、1石というのは大体180リットルくらいのお米の量で、今スーパーで同じ量のお米を買おうとすると、大体5万円くらい。しかし、江戸時代は飢饉があった、非常にお米の価値が高い。自分の時間を労働に置き換えて換算した場合、江戸時代の人が1両貰うのにどの位働けばよかったかは時間を出せばいい。そうすると僕が仮に働くとすると、大工の見習いとして20日間休まず働くそうすると1両もらえる。ということに為ると総務省家計調査によると、1日当たりの大工の見習いの仕事は1万5千円だそうです。そうすると20日間で1両は30万円ということですよ。

昔、水戸黄門で風車の弥七というのが、遊び人で博打でお金を掛けているんですね。僕が小さいころ風車の弥七は小判を何枚か掛けていたんです。あれはちょっとやりすぎだと思うんです。遊び人が小判2枚賭けたら60万円ですからね。ちょっと無理だろうと思っていると、やはり時が進むにつれ風車の弥七がかけられるお金は小さい四角い燻し銀みたいになって額が小さくなってきました。

他にも、よく時代劇ではお代官様が「越後屋そちも悪よのう」と言って袖に切り餅と呼ばれる小判の束をポトンと落としていますよね。切り餅は小判25枚綴りと決まっています。小判を25枚重ねて紙で巻いて両替屋が判を押しているのです。750万ですよ。越後屋があげるとしてもよほどの見返りが無いとしないのではないかと。最近もっと変わった話をする、菓子折りの下に入れるでしょう。桐箱みたいな『山吹色のまんじゅう』とか言いますよね。あれ私も心配になってビデオにとって停止ボタンを押して一つずつ数えたんですよ。あれ、25枚綴りであの厚さだと2重には入ってないから、やっぱり3億円くらいは入っている勘定になるんですよ。以前、賄賂について大体相場がどのくらいか気になり調べてみたことがありまして…。実際賄賂を配った人のほうが聞きやすいから、僕は盛んに途上国などで仕事をしている人たちに「すみません、賄賂の相場っていくらですか?」と聞いたわけですよ。聞いたら皆図つたように「総事業費の1割」と答えたんです。なるほど賄賂の相場は総事業費の1割なのかと。総事業費の1割ということでは3億円だから、30億円。当時の代官所って言うのは支配人口が大体5万人から10万人なんです。ほとんどが庄屋だとか大庄屋に住民票の届出に当たる、宗門人別帳を付

けることだとか道普請だとか、税金の計算とか付加は庄屋・大庄屋に頼んでやっているの、代官所の機能は犯人がいたら牢屋に閉じ込めて番をつけておく



とか、書類が出来上がってきたらうんうんと頷きながら判を押すとか、税務署の一番トップの税務署長の秘書室くらいの役割しかない。あと警察署の監獄の機能しかないので大体10人前後なんです。だから10万人を10人で支配しているわけですよ。ある種住民サービスはほとんどないわけですよ。飢饉になったら一生懸命お米配ったりしてくれて、大体10日から1ヶ月くらいで配っちゃうので、江戸時代の代官所の速さは、今の震災の救助より早いんですね。だけど30億円の公共事業なんてやるはずがないんですよ。だからお代官様の許認可権限なんて大きくないと思っただけだと思います。

●税金の使いみち

先ほど江戸時代の日本の税制というのは農業だけから取っていた。という話をしましたが、そのあとに農業部門から税金をあまり取らなくなるまで、どのくらいかかっているだろうというのを調べてみたら、1890年の段階でも、非農業部門と比較すると、農業部門から6倍取ってるんですね。どんどん幅が収縮して1935年くらいにならないと均衡しない。それでもやはり農業のほうが租税負担率としては大きい。

考えてみたら面白いなと思っただけですけども、東京駅が今年きれいになりましたけれども、東京駅を建てたお金は何処から来ているかと言うと、あれは、農村が米を稼いできてくれたお金で、都市へ税金を使って建てた。ところが戦後社会は逆で、都市部が工業で稼いだ物を、田舎へ道路作るために流し込んでいる。長い目で考えて見ると、税金を発生させるところと、しっかり使う場所がずれている。日本人というのは1回取られたら税制に大して文句言わないんですよ。つまり税制が不公平であったとしても、それを指摘して均そうという声はあまり起さない国民で、ただ上げるといわれると、百姓一揆と一緒に一斉にざつとなりますね。ですから、税制のほころびの中から次の産業が生まれる。ということも言えて、江戸時代は商工業用優遇税制になっていたがために非常に豊かな都市の文化と分業体制が凄いいということ、税金があまり取られないということとの関係ではないかと思っ

取った税金をどの方向に使うかというのは、次の経済発展を決めるというのは間違いない。それは現在の会社でもそうですよね。凄く将来の利益に繋がるところに利潤がちゃんと回っていかないといけないんだけれども、今社会保障費といってご老人を養う方へ自動的に税金が毎年4兆円ずつ増える仕組みになっている。中国や韓国がものすごく追いついてきているのに国力を増進するようなどころへ税金を回しているかをちゃんと考えないといけない。特に質の高い労働力になるような教育を小さい頃からやっていくということは、これは絶対避けては通れない。武士の家計簿のあとがきに書いたのですが、中国のGDPはこの10年で4倍に膨らみ、経団連が言っているようにあと15年で韓国のほうが一人当たりGDPが上るので、このままで行けば、日本は韓国より貧しい国になるんです。

教育費や国力を上げるような先端的な技術などにはうまくお金が回っていないんです。例えばノーベル賞を取った山中先生の研究ですよ。山中先生のような研究、つまり技術開発されたらそれが産業化されて実用化され外貨が取れる。そのような所へ税金を使って整備をかけていくべきです。

●江戸時代の識字率とGDP

江戸時代の人にはどのくらい読み書きができたかということ、名前・住所の読み書きが出来ると言う人は全体の66%はいますが、明治初年に布告や文書、勅令が読めて新聞社説を十分理解できる人

は実は全体の1%にも満たないわずかでした。我々は読書をしたり、新聞を深く理解するようになってから、100年ちょっとしか経ってないんです。その事は記憶しておいていいと思います。高いといっても識字率の程度はそんなものだったのだらうと思います。地域によって識字率に凄く差があります。鹿児島県の人には1889年(明治20年)になっても大体2割の人しか字が読めません。成人ですよ。滋賀県は凄いですよ。同じ時代で字の読めない人が25%しかいません。江戸時代まで遡ると滋賀の女性は大体7割くらいは字が読めないとするのだが、逆に3割は読めるわけです。滋賀県の男性は江戸時代から9割は字が読めた。これは北欧、恐らくイギリスやドイツを越えています。江戸時代の滋賀県の男性は世界最高水準の識字率であったと僕は思います。

また、当時の1850年のヨーロッパの識字率ですが、スウェーデンが90%でロシアが10%イタリアやスペインが20%台、今この通り、豊かさと貧しさが比例してますでしょ。日本はどの辺りかといいますと、イタリアの上ベルギーの下、男女平均すると4割前後だらうと、日本の識字率は日本全国ならしてみると、イタリアには勝っているが、ベルギーには負けているだらう。但し、滋賀県の男性はスウェーデン並みで、ドイツにも勝っているだらう。男も女も入れると負けますね。世界中で、字の読める人が固まって住んだのは、この関西の地域とヨーロッパだらうと。東北へ行っても鹿児島や九州の南端へ行っても、本当に読めない。朝鮮半島や中国も昔、中世は、大陸の人々というのは読めたんです。人口比で言うと幕末の中国や朝鮮半島の人たちの識字率はそんなに高くない。また、GDPが1970年1980年ごろ1万ドルを超えていた国と、識字率が60%を超えていた国がびったり一致するんですよ。この150年間その格差は解消されていないんですよ。

●武士の家計簿について

武士の家計簿は、神田の古本屋に157,500円で売られているのを見つけました。当時の僕の年収が百数十万円、それからするとちょっとつらかったのですが、買わないと駄目だと思い、これを買って帰りを分析いたしました。だいたい40俵から180石まで出世したお家の家計簿です。これ見てみるととんでもない量の借金を抱えているんですよ。

猪山家の家計収支(天保14年)収入で言うと2人が働きに出ていて大体一人の収入が700万円ずつくらいの収入がある。だから1,400万円位収入があるのに、借金の残高を足し合わせて見ると2,800万円くらいあるんですよ。1,400万の収入で2,800万くらいの借金は今の感覚なら大丈夫かと思うんですけども、当時の武士に対して課せられる利子は高いんです。18%だからサラ金と同じなんです。そうすると1,400万円のうち500万円を利払いに当て900万円の収入にしたとしても永久に借金は減らない。もう永久にそれを払い続けなければいけない。人が死んだとしても子に証文が引き継がれるシステムですから、この家は借金地獄から抜け出す事が出来ない。何故、利子が高いかというと、実は大名がお金借りる時は5%で借りられるんです。一般の農民が借りる時は10%で借りられるんです。ところが武士になると18%とか20%になるのはなぜかというと、武士は担保を設定する事が非常に難しい、武士の領地や屋敷に担保は設定出来ない。なぜかというとそれは殿様からの拝領品で、例えば僕が100石の武士だったとして、立命館大学さんから1,500万円借りたとして、返せなかったと、100石の領地を立命館大学さんに召し上げてもらって、次は僕の代わりに立命館大学さんが武士になれるかと思ったらそうじゃない。また、もし居直られて「もう返せんもんは返せん!」と言って、刀をドンとやられると、もうそれ以上町人は入って行く事が出来ないということがあるので、武士には無担保融資に近いくらいの18%という金利でないと貸せない事情があった。一方大名のほうはそれに比べると大きな権限も持っているし、特産物だとかなんだかんだと利点があるので、三井や鴻池やそういった大きな豪商には3%や5%という利子、もしくはそれ以下でも貸すことが出来た。つまり身分ごとのプレミアムが、武士プレミアムが上に乗った利子でしか借りられなかった、だからお金の面では如何に武士は信用が

なかったかということです。

実はこういう私的財産権の保護、もしお金を返してくれなかったら、裁判所の執行官がいてちゃんと貸し方の利益を取るといシステムが確立していないことこそが江戸時代の最大の問題点で、経済発展を阻害していた一つの理由なんです。江戸時代の経済を眺めて見ると、本当に取引していい相手かという「取引費用」が多すぎるという社会であったというのは言えると思います。

どうしてこんなに貧乏になるのかというと、一言で言うと身分に伴う「身分費用」と私が名づけた費用が多すぎるからです。武士は一人では出歩けません。出歩けないどころか、草履取りを連れて行かなければなりません。しかも草履取りを雇うにはご飯米がいる。お寺にお布施が年間30万円位。今お寺にどのくらい入れているかというと、お盆に1回やってきて5千円くらいが相場だそうです。うちは父親が一度間違えて1万円包んだそうです、あれは一度上げたら下げたはいけないものらしい、えらい迷惑をこうむっているんですけども、江戸時代の武士は25万とか30万とか平気でぼんぼんつぎ込んでいたらしい。さらに家にやたらに親戚が来るんですね。なんと客が1年間に205人来ているんですよ。来る度に草履取りや下女に対して御引きという千円くらいのおひねりを渡さなければならぬ。200回来られたらその度に支出が生じる。だけどそういう慣習が出来ているばかりに、逆を言うと凄いですよ。農民は主人について武士のところへ奉公に行くとか軒訪問することに千円もらえるわけです。ですから5軒も一日ついで回れば、5千円入ってくるわけですよ。こりゃありがたいですよ。そうやって武士の家の奉公人になることによって、取られた年貢を農民たちは取り返しているシステムを持っている。だから実際四公六民だったとしても、世襲の武士は人口の3.3%しかなくて、3.3%しかいない人が米の40%を取っていたら普通の農民の4倍米を食べるのかというそうではなくて、ちゃんと農民の中へ流れていく。還流のシステムがあるんですね。そういうことが見えてくるわけです。

武士と農民の結婚年齢ですけれども、これは面白い結果が出ました。宇和島藩の知行取という武士は男子23歳で結婚するんですけども、切米取の武士という下級武士・領地を貰っていない武士は31歳まで結婚できていないのです。丹波篠山でも同じで篠山藩士・上級武士(上級といっても丹波篠山は小さいですから、下級武士に相当します)は28歳で結婚している。同じように美作や濃尾平野の農村であっても、田んぼをいっぱい持っている農民は20歳とか27歳で結婚するんだけど、田んぼをあまり持っていない村なんかは、3石以下の農民なんていうのは27歳近くにならないと結婚できてない。特に女性は大きな年齢の差があります。都市でも同じです。これは何を意味しているかというと、江戸時代の社会というのは、武士に生まれるか、農民に生まれるか、町人に生まれるかの様な、身分がその人の生活を決めるというよりは、武士なら武士の中で家老に生まれるか下級武士に生まれるか、百姓なら大庄屋・地主に生まれるか田んぼを持っていない水のみの方に生まれるか、ということで人生が変わってくる。だから身分制の社会というよりは、その身分内の格差が非常に大きい。

ここに実は対立の原点がある。百姓一揆のときにまず、百姓一揆や打ちこわしは何処へ向かうかというと、百姓一揆は地主の家や庄屋の家を打ち壊しますね。決して城郭には行きませんね。武士の家やお城は壊したりはしませんね。例えば京都の市民が打ち壊しを始めたとしたら、豪商の家に行って米を突き破りますよね。米俵を突き破って、ばら撒きますよね。同じ身分のちょっと強い



人を攻撃する。明治維新はどうやって起きたかという、下級武士が上級武士の政権に対して坂本竜馬のように訴える。

身分の間に、なぜこのようなことになるかという、地位非一貫性と言って身分内じゃんけんが成り立っているんです。武士は身分は高いだけのお金は持っていない、農民は身分はそこそこでお金もそこそこ、町人は非常にお金を持っているんだけど、馬鹿にされていて、武士の前ではしょっちゅう土下座をさせられている。で圧倒的に勝つ勝ち組がない。だからあんまりうらやましいとも思わない。先ほど言ったように私がもし小さな藩の家老だったとして、草履取りを連れて歩いておりますけれど、猪山家って武士なのに自分の財布に入っているのは一番少ない時で3,800

円。もうそれ以外に財産がない状態、その時に葬式があって足袋を買えないものですから、大変な事になっていますよね。で一方3,800円しか主人は持っていないのに、後ろについて歩いている草履取りは付いて歩いているだけで、1軒行けば確実に千円もらえるんですね。だからうらやましいとは思わないと思うですよ、あんまり。これで安定が保たれていたけれど、今の日本社会を見てみると、格差というものは無くなってきつつあるから、まあ先ほどの周辺諸国の経済的対等であるとかですね、いろんな問題もあって、前途多難だなということをお話から学んでいただければ、幸いです。という事でおわりといたします。

ゼミ同窓会を行いました

2012年度寄せられたゼミ同窓会のご報告の中から、一部をご紹介します。

1983年度 立命館大学経済学部卒業生同窓会 七夕の会

2012年7月7日(土)に1983年度立命館大学経済学部卒業生同窓会が開催日にちなみ「七夕の会」として、大阪で開催されました。

同窓会と聞いて、小学校・中学校・高等学校までであるならば、地域性や人間関係、幼い頃からの馴染み等も関連し、頻繁とまでは言わないまでも催される機会はそれなりにありますが、それが大学ともなると、それぞれ内部からの繰り上がりや伝統ある体育会・同好会・ゼミ・サークルでもない限り、1、2回生の頃の第二外国語クラスでのケースになると、皆、全国地方ばらばらになっており滅多にそんなチャンスはままなりません。時にはふと頭を過ぎる事はあっても皆日々の生活に追われる形となり、実現に至らない現状です。

今回の同窓会開催の原点となる一人の「プチ同窓会でもしたいね」という想いから、10名程度の集まりでしたが、卒業後約30年を経て年齢も50歳を越えたつい先日ようやく同窓会が実現しました。それぞれの子供達の年齢も丁度あの頃の我々と同じ年代になった今だからこそ思い起せたのかもしれない。一度再会が果たせたら、あの頃には無かった昨今の情報化時代、早速連絡先をやり取りし、人生の中に又一つ有意義な引き出しを作る事が出来ました。

次回は、京都での再会を計画しております。会を追う毎に、あの頃の友達の輪も徐々に広げてゆければと考えております。伏す目に清しや鴨の流れの…懐かしい衣笠キャンパス、そして以学館!! 立命館大学経済学部同窓会を日頃支えて頂いております事務局・役員の方々、誠にありがとうございます。(1983年度卒業 細川良幸)



若林洋夫教授を囲む 第6回若葉会(若林ゼミ同窓会)実施について

2012年11月3日(土)に京都タワーホテルにて経済学部 若林洋夫教授を囲む第6回若葉会(若林ゼミ同窓会)を開催致しました。参加人数は卒業生81名(お子様1名含む)、学部生32名に若林教授を合わせた114名と、海外からこの日の為に帰国された方を含めた100名を超える若葉生が集まることになりました。

同窓会自体は、7期生(1986年卒)の山澤様からの「開催の挨拶」をかわきりに、期の代表からショートスピーチをいただくなど、各卒業期の誰でもゼミ当時を思い返すことのできる、カリキュラム内容でした。また、ピンゴ大会も行われ、世代をこえ、卒業生、現役生が触れ合う機会も数多くあり、現役生にとって卒業生から直接「社会」の話を聞く、良いきっかけ作りにもなりました。

最後に若林教授からは、「若葉会を通じて、横の繋がりでだけでなく、縦の繋がりを強めてほしい。私が伝えられなかったものを、諸先輩方が教えてくれることだろう。若林ゼミの強みは、<繋がり>だ。」と熱いお言葉で同窓会は閉幕となりました。

今回の若葉会開催は若林ゼミ卒業生、現役生一同、若林ゼミで良かったと再認識した同窓会でした。

(2007年度卒業 中村天翼)



第3回松原ゼミ同窓会

2012年11月24日(土)、41名の同窓生が参加し、ホテルポストプラザ草津にて、第3回松原ゼミ同窓会を開催致しました。

前回の松原教授の学部長就任お祝い会に続き、今回も再選のお知らせをいただく大変うれしい会となりました。

会では、松原教授より最近の研究のお話をいただき、ますますの活躍ぶりに全員が松原教授の偉大さを改めて感じました。続いて同窓生によるフリースピーチ、学部生によるフィールドワークの発表など盛りだくさんの内容で盛況のうちに閉会することが出来ました。

同窓生は、北海道から九州まで日本各地より集まり、職業も多様であり、それぞれの場所での頑張りや苦労などを忌憚なく語り合い、ゼミ生同士の親睦をより深め、参加者全員が何かを得ることの出来る会であったのではないかと思います。(1999年度卒業 高橋亜弥)

経済学部より

【新任教員】（職位・50音順）

2013年4月より経済学部以下に以下の専任教員をお迎えします。

氏名	任用職名	主な担当予定科目
FLATH, David	教授	外国語専門ゼミナール
野一色 直人	教授	行政法
黒川 清登	教授	国際経済協力論
中村 健	教授	教育相談の研究
KAWAMURA, Michelle	准教授	英語

【退職教員】（職位・50音順）

2013年3月末をもって以下の教員が退職されます。

氏名	職位	専門分野
角田 修一	教授	社会経済学、経済学方法論、生活経済論
金井 萬造	教授	観光学
藤岡 惇	教授	平和の経済学

2013年4月より、角田先生、藤岡先生は、本学特別任用教授として、金井先生は客員教授として在職されます。

【卒業証明書・成績証明書が必要な方は…】

下記「経済学部事務局」の窓口で発行いたしております。また、郵送でのお申込み受け付けています。郵送の場合は、「**証明書交付願**」（様式自由。以下の事項をご記入下さい）に「**証明書発行手数料**」（郵便切手又は定額小為替でお願いします）、「**返信用封筒**」（送り先記入・切手貼付）、「**ご本人を確認できる書類**」を同封のうえ、下記「経済学部事務局 証明書発行係」までお申してください。

- ① 氏名・ふりがな ② 生年月日 ③ 卒業年月、学部・学科 ④ 連絡先住所・電話番号
⑤ 必要な証明書の種類と枚数 ⑥ 使用目的（簡単で結構です） ⑦ 厳封の可否

※ 証明書はできる限り日程に余裕をもってご請求いただきますようお願いいたします。英文表記による証明書や学力に関する証明書等は、一定日数を要する場合がございます。

※ 手数料は一通につき300円です。

※ 詳しくはHPでもご案内しています。 http://www.ritsumei.jp/ec/ec09_j.html

同窓会事務局より

同窓会費の納入方法について

同窓会は、皆様から納入された終身会費（¥10,000）で運営しています。入会を希望され、会費をまだ納入されていない方は、同窓会事務局までご連絡ください。

住所変更された方は……

会報の送付先の変更は、立命館大学校友会（TEL：0120-252-094、FAX：0120-252-095）までご連絡ください。同時に校友会誌「りつめい」の送付先変更もさせていただきます。

【お知らせ】

※本誌は皆様の掲示板でもあります。各ゼミ同窓会や個人の近況・情報等、どのような内容でも結構です。事務局までお寄せいただければ、掲載させていただきます。

※同窓会に対するご質問・ご希望がございましたら事務局までご連絡ください。

【『学生時代の思い出』を募集します!!】

皆様の学生時代の思い出や近況報告等を執筆いただき掲載する、『学生時代の思い出』を募集しております。これは、「原稿執筆者それぞれの学生時代の思い出を振り返ることにより、その時代時代の社会情勢や風潮、大学や経済学部を取り巻く環境、学生像などを顧みること」を目的に出版された『50周年の思い出』の続編にあたるもので、広く経済学部同窓生の皆様より原稿を募集したいと考えております。掲載ご希望の方は以下の要領にて事務局までお送りください。

- ① 原稿（学生時代の思い出や近況報告等、2,000字程度）
- ② 経歴（生年月日、卒業年、勤務先等、可能な範囲で結構です）
- ③ 写真（可能でしたら、学生時代と現在の2枚をお送りください。使用後、返却させていただきます）

頂戴いたしました原稿は、経済学部同窓会HPにも掲載させていただきます。

立命館大学経済学部同窓会事務局

〒525-8577 滋賀県草津市野路東1-1-1
立命館大学経済学部事務室内
TEL:077-561-3940 FAX:077-561-3947
E-mail:ecalumni@st.ritsumei.ac.jp

経済学部HP：http://www.ritsumei.jp/ec/index_j.html

経済学研究科HP：http://www.ritsumei.jp/gsec/index_j.html

学部HPの「同窓会」にて最新の情報をお届けしています。